或問　WAKUMON　49
No.40,（2021）pp.49-57

陝西・山西における漢画像石の雲気文装飾について

李宸鋭※

前言

中国古代において文様を用いて物品を飾る伝統は、長い歴史が見られる。新石器時代において陶器を飾ったことがあり、殷・周時代においても青銅器にさまざまな文様が装飾された。秦代になると、宮殿建築や漆器などに文様を飾る事例が数多くみられるようになる。ついで漢代には、墓や祭祀施設などの墓葬にまつわる空間を画像や文様で装飾することも流行した。その媒体は、墓地の入口を示す「門闕」[1]や「祠堂」など地上の諸施設、ならびに地下空間である墓室の門や壁面・梁・柱・棺などである。[2]これらの装飾の中で、最も代表的なものは画像石である。

画像石に関する研究は、中国では北宋時代より始まったとされるが、当時には金石学的もしくは考古学的な視点から研究を行われた。[3]清代から画像石の図像内容に注意し歴史的な研究が行われ、画像内容により漢代人の生活世界を考察し、研究成果も極めて多くなった。日本学界でも、関野貞氏、土居淑子氏、信立祥氏、菅野恵美氏などの画像に関する研究があり、それも画像石の画像内容や芸術性を中心とする研究である。そのなかで関野貞氏は早くから、画像内容を周る装飾用の線即ち装飾文様に注意し、また祠堂における画像石を中心とする山東画像石の文様を分類し考察した。[4]信立祥氏も画像内容の主題による配置した不同の装飾文様は重要な役割があると指摘し、[5]山東における祠堂の車馬出行図に多くみられる文様に関する若干の考察を行った。[6]土居淑子氏は山東の沂南地域における画像石を飾る植物系文様を考察した。[7]近年に中国の姜生氏は漢画像石の装飾文様の符号の意味も検討した。[8]このように装飾文様の重要性が徐々に注意されてきたが、まだ十分な研究が行われていない。

※ 李宸鋭：中国・東北師範大学　歴史文化学院　博士後期課程。

[1] 古代中国の宮殿、祠廟、陵墓などの門前の両脇に張り出して左右対称に設けられた望楼。（『世界大百科事典』第 2 版、解説（1971 年、平凡社））。

[2] 菅野恵美『中国漢代墓葬装飾の地域的研究』序章（誠勉出版、2012 年）。

[3] 佐藤直樹「中国漢代画像石の研究――図像解析によるヴィジュアルコミュニケーション技術の解明」（『愛知県立芸術大学紀要』、2005 年）。

[4] 関野貞「支那山東省に於ける漢代墳墓の表飾」（『東京帝国大学工科大学紀要』第 8 冊 第 1 号、1916 年）

[5] 信立祥『中国漢代画像石の研究』、（1976 年、同成社）、27 頁。

[6] 信立祥「漢代画像中的車馬出行図考」（『東南文化』1999 年第 1 期）

[7] 土居淑子『古代中国の画像石』（同朋舎、1986 年）

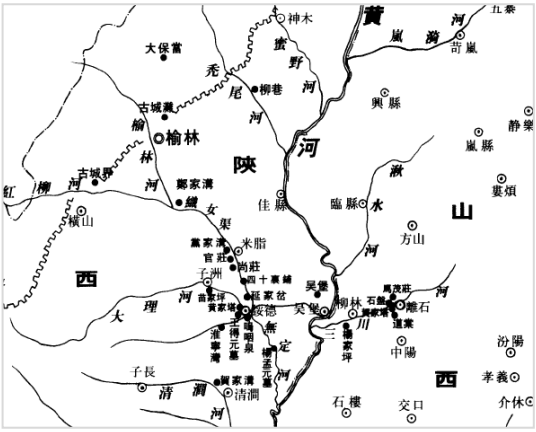
[8] 姜生『界定者：漢墓画像辺飾研究』（『東岳論叢』、2015 年第 11 期）

画像石における装飾文様は種類多く、各地域の社会状況に応じて流行していた文様も異なった。陝西・山西地域において確認できる装飾文様は、雲気文、穿環文、菱形文、鋸歯文である。他の地域と比べると、この地域には二方連続した唐草模様のような雲気文の装飾は極めて多く、また雲気文によるバリエーションも豊富である。特に昇仙と車馬出行を題材内容とする画像石の装飾文様は、雲気文を利用する場合が多く見られる。そうすると、その画像石に見られる雲気文装飾はどのような特徴があるか、どのような使用意味があるかを探求したい。

そこで本論文では、『中国画像石全集』[9]に掲載されている漢画像石を中心に、陝西・山西地域を中心とする画像石の雲気文装飾を検討し、題材によるその雲気文装飾の意味も明らかにしたい。

1、陝西・山西における漢画像石の分布と特徴

現在知られる漢代の画像石の分布している地域に陝西省と山西省がある。この地域の漢画像石は、次の地図に見られる、陝西省の綏徳、米脂、楡林、および山西省の離石、柳林、中陽などから集中に出土した。それらは遅くとも後漢中期に出現したと考えられ、いずれも鮮明な地方の特色を有するとされる。[10]



陝西・山西漢画像石主要分布図[11]

漢代において、これらの地域は上郡と西河郡に属した。『後漢書・西羌伝』には、次のようにこの地域を紹介している。

> 永建四年（129）に至り、尚書僕射の虞詡が次のように上疏した。「…『尚書』禹貢篇における雍州の地域は、その田土が上品で、しかも肥沃な土地が千里に広がり、穀物の稔が

---

[9] 湯池編『陝西・山西漢画像石』、『中国画像石全集』第五巻（山東美術出版社、2000 年）に収録。

[10] 信立祥『中国漢代画像石の研究』、(1976 年、同成社)、5 頁。

[11] 湯池編『陝西・山西漢画像石』、『中国画像石全集』第五巻（山東美術出版社、2000 年）に収録、2 頁。

豊で積み上げられ、また亀茲の塩池があり民の利益となっております。…そのため、孝武皇帝と光武帝が朔方郡を築き、西河を開き、上郡を置いた。それなのに民にとって思いがけない災いとして、羌たちが内側から反乱を起こすことに遭い、郡県における兵乱による荒廃が二十年余りとなります。肥沃な土地を棄て、自然の財を損なうのは利とはいえません。河山の拠り所を離れ、険阻でない場所を守るのは、備えとするには難しいのです。…」文書が上奏されると、帝は三郡を復活させた。謁者の郭璜に、移住者を督促して各々の旧県に帰らせ、城郭を修繕し、物見台と宿駅を設置した。それからまもなく川の流れを激しくし水路を浚渫して、屯田を実施したところ、内地の郡では、年間一億以上の費用を節約できた。このようにして、安定郡・北地郡・上郡および隴西郡・金城郡に常に穀物を備蓄し、その量は数年であれば、民に行き渡るほどであった。[12]

禹貢において雍州に位置している上郡と西河郡とは土地が肥沃であり、穀物の稔も多く積み上げられた。しかし、北方辺境に位置していたため、常に戦乱が及び、後漢に入ると二十年後には放棄された。永建四年（129）に至り、尚書僕射の虞詡の勧めにより、後漢は国境を固めるために、安定郡·北地郡·上郡および隴西郡において屯田政策を実施し、農業が大きな発展を遂げることになったとされる。この地域から大量の画像石が出土した背景には、少なからず上述のような地域経済の発展と関係があると考えられよう。

次に、陝西と山西における画像石の図像と、そこに施された装飾文様について簡単に紹介したい。この地域の画像石には、故事を題材とした図像は少ない。刻法は浅い陽刻で、石の表面は平らに磨き上げてあり、他の地域とは異なる独特の刻画表現があったとされる。[13]信立祥は、「ほかの地域と比べて、この地域の漢画像石の構図で最も特徴的な点は、極めて発達した装飾花紋帯である」と指摘する。[14]具体的に分析すると、この地域の画像石の装飾文様は、直線文が多く、主に楡林、綏德、米脂地区に分布している。ほかには、雲気文の装飾文様も屡々出現する。また簡単文様による組み合わせた複合文様もあるが、ただ用例が少ない。

そこで、この地域の画像石に頻繁に見られる雲気文の事例を挙げ、陝西省と山西省の画像石における雲気文の特徴を検討したい。

---

[12] 『後漢書』巻八七、西羌伝第七七。原文には「至四年、尚書僕射虞詡上疏曰。「…禹貢雍州之域、厥田惟上。且沃野千里、穀稼殷積、又有龜茲鹽池以為民利。…故孝武皇帝及光武築朔方、開西河、置上郡、皆為此也。而遭元元無妄之灾、眾羌内潰、郡縣兵荒二十餘年。夫弃沃壤之饒、損自然之財、不可謂利。離河山之阻、守無險之處、難以為固。…」書奏、帝乃復三郡。使謁者郭璜督促徙者、各歸舊縣、繕城郭、置候驛。既而激河浚渠為屯田、省内郡費歲一億計。遂令安定・北地・上郡及隴西・金城常儲穀粟、令周數年」とある。

[13] 土居淑子『古代中国の画像石』（同朋社、1983 年）、13 頁。

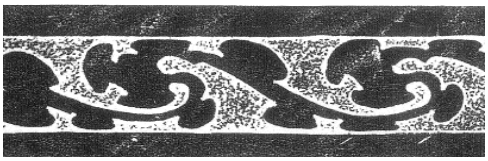
[14] 信立祥・蒋英炬『中国画像石全集 5　陝西・山西漢画像石・陝西、山西漢代画像石綜述』（四川美術出版社、2000 年）14 頁。

二、雲気文の特徴

雲気文とは、よく見られる伝統的な文様で、雲の形のことである。大形徹氏は「雲気文は雲の文様化とみなされてきたが、その淵源はスキタイの鹿の角の文様化に求められる。角は大きく成長し、また生えかわることから復活再生観念をもつとされる」[15]と述べた。田自秉氏は「雲気文は古代の鳥文様や蟠螭文から発展したもの」[16]と述べた。いずれの淵源にしても、雲気文は具体的自然現象から抽象して芸術的加工をしたものだと言える。雲気文は昇進と順調の象徴があり、また「慶雲・五色雲・景雲・卿雲」と名づけられ、瑞祥を表した。雲気文の形により、渦巻模様、唐草模様、鳥獣模様など、さまざまな文様と組み合わせられ、その種類も多い。漢画像石では、唐草模様や鳥頭模様と結びついた雲気文がよく見られる。この地域において雲気文を使用したことが多くある。

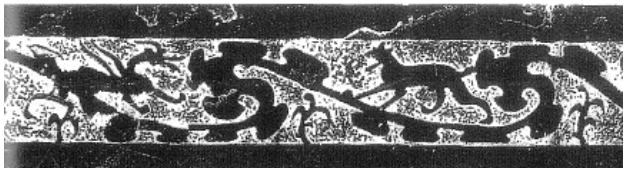
1　唐草模様のような雲気文

米脂地区と綏徳地区において特に注目すべき雲気文は、米脂官荘墓門楣画像（図１）、綏徳墓門楣画像（図２）のものである。その雲気文は上下に S 字形が連続する唐草模様のような雲気文で、力強い筆触を特徴としており、盛り上がる様な雲気文の形を表現した。



米脂官荘墓門楣画像（一部）（図１）

綏徳墓門楣画像（一部）（図２）



米脂官荘墓室北壁横額画像（一部）（図３）

前者（図１）の S 字形は横になって長くて、後者（図 2）より、弧線の流れが繊細である。また、各種の鳥獣は雲気文の空白所に詰めている形も多い（図 3）。

2　巻き込んだ雲気文

離石馬茂荘左表墓室はほとんど巻き込んだ雲気文による装飾がされた。離石馬茂荘左表墓室横額画像（図 4）は、蔓草が流線形に絡み合ったように連続した雲気文である。このモチーフは内側と外側に巻き込んだ形である。このような雲気文は柔らかい優美な曲線を用いて刻んで、

---

[15] 大形徹『雲気文と鹿の角』（『形の文化研究』巻 6、2011 年）

[16] 田自秉、呉淑生『中国紋様史』（高等教育出版社、2003 年）、145 頁

繊細と精緻な文様を特徴とする神秘的感覚を持っている。

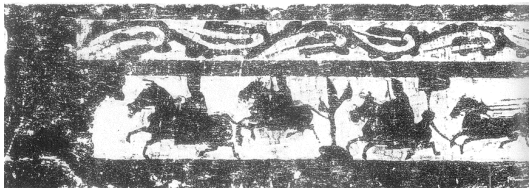
離石馬茂荘左表墓室横額画像（一部）（図 4）

３　他の形の雲気文

他方、繊細また柔らかい筆触による描かれ、自由のバリエーションが豊富でしかも優美な雲気文もある。代表的ものは、離石馬茂荘三号墓前室東壁横額画像（図５）のような S 字形の美しい曲線により構成された「気韻生動」とした雲気文である。[17]このような繊細の雲気文は主に離石地区と綏徳地区とに分布している。米脂地区も見られるが、ただ少ない。また、離石馬茂荘三号墓門楣画像（図６）・離石馬茂荘門楣画像（図７）を例としてみると、その雲気文は図像の主題と関連性があり、車馬出行図に多く施される傾向があると見られる。

離石馬茂荘三号墓前室東壁横額画像（一部）（図 5）

離石馬茂荘三号墓門楣画像（一部）（図 6）



離石馬茂荘門楣画像残（一部）（図 7）

一方、鹿を画像の中心として、周りが雲気文を装飾している画像石も見られる。代表的なものは、米脂墓門左立柱画像（図８）・綏徳延家岔墓前室西壁左側画像（図９）である。この二つの画像は、左右の雲気文は異なるが、いずれにしても同じ繊細な曲線で描かれ、延々と続く独特な特徴がある。

[17]「気韻生動」とは、中国絵画の理想を表した言葉。《古画品録》序の六法の第１にあげられ、対象の生命、性格が画面にいきいきと表現されること。時代により多少変化し、北宋の郭若虚によって、気韻は題材の如何にかかわらず、作家の人格が画面に反映するものであると規定され、これが文人画の主張の中核となって、明清時代まで受け継がれた。

米脂墓門左立柱画像（図 8）

綏徳延家岔墓前室西壁左側画像（図 9）

また、雲気文と他の文様と組み合わせた複合文様もある。米脂官莊墓門組合画像（図 10）は、鋸歯文[18]と雲気文と菱形文を組み合わせた複合文様が施されている。上部には直線文があり、その下には均等の様子で連続した複数の鋸歯文および雲気文がある。また、下部の菱形文のなかには二重斜点があり、菱形と菱形の間に弦文[19]という弓弦のような鋭い斜線が上下に同じ間隔で繰り返し刻飾されたが、その上下ともに同じ場所に横線を配置する形による構成された独特な文様である。

米脂官莊墓門組合画像（図 10）

綏徳墓門楣画像（図 11）は、二重雲気文と穿環文を組み合わせた複合文様帯である。しかも上下の雲気文は対称であり、S 字形の繊細な曲線による構成された文様である。ただし、上下に対称といっても、上のほうが変化に富んでいて、鋸歯文と細い線が雲気文に沿って配置されている。

綏徳墓門楣画像（一部）（図 11）

陝西省および山西省の漢画像石における雲気文をみると、バリエーションが豊かで、車馬出

---

[18] 「鋸歯文」とは、三角形を連鎖して表現した幾何学文様のひとつである。鋸の歯状に並べたように見えることから命名された。（坂詰秀一『国史大辞典４』「鋸歯文」（吉川弘文館、1984 年）。加納俊介『日本歴史大事典１』「鋸歯文」（小学館、2000 年）。

[19] 渡辺素舟『東洋文様史』、56 頁、「青銅鼎殷中期琉璃閣出土第 113 図」解説による。

行と鹿及び神々の主題に関連性が多い。これは、この地域の雲気文装飾の使用特徴である。なぜ漢画像石には雲気文装飾が多用されているか、次節において検討したい。

三、装飾文様を示す漢代の精神世界

画像石は漢代の葬送儀礼を体現する芸術祭儀である。陝西・山西における画像石は同時代の他の地域の画像石と比べて、神々の天上世界、崑崙山の仙人世界を通じて人間世界と地下霊魂世界の相互関係を描写し、人々の死生観と宇宙観を表現している傾向が多くある。昇仙と墓の主人公の車馬出行に祭祀を行うのは、この地域における最も重要な主題内容である。後漢では死後の強い憧れが不老不死となる昇仙である。その昇仙伝説により、西王母のいる崑崙山は、不死の木があり、人々に憧れの極楽仙境となる。その同時に、西王母に対応する東王公も創造された。離石馬茂荘四四号墓前室南壁右側画像（図１２）は、画面が左右二つに分けている。右は雲気文で、左は上から下まで四段に分けて、上下は雲気文を装飾している。第二段は、東王公が西巡している西王母に会う伝説である。崑崙山の木の間の天柱の上、二つの雲形の華蓋の下に、左側の西王母が右に杯を持って招待し、右側に座る東王公が手をあげて譲ろうとする。二人の間に机があり、上に匙や鉢を置いた。西王母、東王公、羽人、仙人、神獣などの神仙に関する瑞祥テーマは、全て細かく繁雑に刻んで、特にその間の雲気文装飾など、婉曲に回転し、滑らかに飛んで、曲線の美しさに富んでいる。ゆらめく雲気は天界仙境のシンボルで、崑崙山の不思議な幻、流れるリズムに現れ、飄々として仙境に入るような感を与えている。これはまさに漢代の人々が創造しようとする超人間境地である。

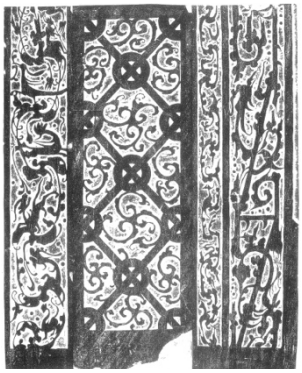
離石馬茂荘四四号墓前室南壁右側画像（図 12）

米脂墓門左立柱画像（図 13）

一方、鹿と雲気文組み合わせた画像石も見られる。米脂墓門左立柱画像（図 13）は、鹿を画像の中心に、周りが雲気文を装飾している。左右の雲気文は異なり、渦を巻きながら伸びていくのは左側の雲気文の特徴であり、右側は繊細な曲線を刻んで女性らしい優美を表している。このような連続してしなやかな雲気文は精巧で生き生きとしている。真ん中に、雲気文は鹿に

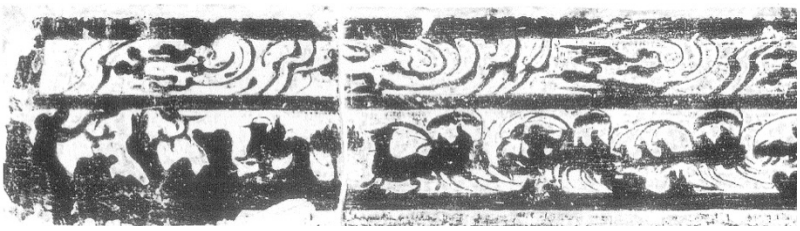
囲まれ、鹿の角のようにどんどん伸びて、生命力に満ちている。前述のように、雲気文の淵源は鹿の角、復活再生の意味を持つとされる。また中国では「鹿」と「禄」の発音（lù）が同じ、吉祥を象徴し、かつ復活再生の願いが強い死生観を表現されていると考えられる。

また、変化が富んだ複雑な雲気文は、綏德と離石地区から多く出土している。神や仙人などの周りに雲気文を入れることで、幻想的な印象を与える。このような変化に富んだ充填文様は、画面のバランスをとることができて、充実した境地を体現する。綏德延家岔墓前室南壁左側畫像（図１４）は、穿環文の余白所には蔓草が流線形による絡み合ったように雲気文が装飾し、唐草模様の余白所は各種の鳥獣の文様を詰めている。これらの文様は漆器の文様とよく似ている。画面はいっぱいに見えるが、空間が広く空気が通っている感じで、圧迫感がない。



綏德延家岔墓前室南壁左側畫像（図 14）

離石地区の画像石の雲気文は、車馬出行図との関連性がある。従来、雲気文は中国の文様に生気と活力をもたらし、吉祥文様として多用されて、神々の天上世界と繋がりが強い。離石馬茂荘三号墓前室東壁横額畫像（図 15）は、上に雲気文を装飾し、墓の主人は仙人の遣わした使者に導かれて崑崙山へ昇仙されてきた。その画面は死亡に恐怖が見えなく、和やかで楽しい雰囲気がある。この流働感あふれる雲気文は神秘世界を尊ぶ観念と合致し、漢代の装飾文様の中に十分な発展を遂げた。その変化の形式の多様さ、表現手法の豊富さは他に文様を見ない。文様と内容を組み合わせる構造は、流れ変幻する雲の中に、種々の珍禽異獣、仙道の人物を充填した。このような文様配置は、バランスが統一されて、活力に満ちた一種の神秘の雰囲気を見せ、そのため雲気文による装飾されたと考えられる。



離石馬茂荘三号墓前室東壁横額畫像（図 15）

結論

本論において陝西省および山西省から発見された画像石に見られる雲気文による装飾された文様の主要様式を述べた。その特徴として次の三種に分類できよう。1 唐草模様のような雲気文・2 巻き込んだ雲気文・3 他の形の雲気文である。

1 唐草模様のような雲気文は、上下に S 字形が連続して力強い筆触を特徴とし、盛り上がる様な形を表現している。また、各種の鳥獣は雲気文の空白所に詰めている形式もよく見られる。

2 巻き込んだ雲気文は、離石馬茂荘左表墓室に代表的な文様である。その一部は蔓草が流線形に絡み合い連続して内側と外側に巻き込んだ形式がある。このような雲気文は柔らかい優美な曲線を用い、繊細と精緻な文様を特徴とする神秘的感覚を持っている。

3 他の形の雲気文は、繊細また柔らかい筆触による描かれ、自由のバリエーションが豊富でしかも優美な形がある。他の文様と組み合わせた複合文様も見られ、繊細な曲線が延々と続く独特な特徴がある。

流働感あふれる雲気文は神秘世界を尊ぶ観念と合致し、漢代の装飾文様を発展させた。その変化する形式の多様性、表現法の豊富さ突出していた。文様と内容を組み合わせる構造は、流れて変幻する雲の中に、種々の珍禽異獣、仙道の人物を充填した。このような文様配置は、構成が統一され、活力に満ち一種の神秘性を彷彿させるため雲気文による装飾が多用されたと考えられる。

また、雲気文は昇仙や車馬出行などの題材に関連性が多い。それは神秘性或いは再生の意味を表現している。即ち雲気文は単なる装飾ではなく、題材に応じて使用され、そこの題材意味を表す際に不可欠な部分である。

以上のように、画像石は地下墓室に人間現実世界と隔絶する地下霊魂世界の居場所ではなく、生命と活力に満ちた宇宙世界を再生すると言う強い願望を表すためで画像石に刻画しようとしたと言えるであろう。

近代東西言語文化接触研究会

本会は、16 世紀以降の西洋文明の東漸とそれに伴う文化・言語の接触に関する研究を趣旨とし、具体的には次のような課題が含まれる。

１、西洋文明の伝来とそれに伴う言語接触の諸問題に関する研究
２、西洋の概念の東洋化と漢字文化圏における新語彙の交流と普及に関する研究
３、近代学術用語の成立・普及、およびその過程に関する研究
４、欧米人の中国語学研究（語法、語彙、音韻、文体、官話、方言研究等々）に関する考察
５、宣教師による文化教育事業の諸問題（例えば教育事業、出版事業、医療事業など）に関する研究
６、漢訳聖書等の翻訳に関する研究
７、その他の文化交流の諸問題（例えば、布教と近代文明の啓蒙、近代印刷術の導入とその影響など）に関する研究

本会は、当面以下のような活動を行う。

(1)　年３回程度の研究会
(2)　年２回の会誌『或問』の発行
(3)　語彙索引や影印等の資料集（『或問叢書』）の発行
(4)　インターネットを通じての各種コーパス（資料庫）及び語彙検索サービスの提供
(5)　(4) のための各種資料のデータベースの制作
(6)　内外研究者との積極的な学術交流

会員
本会の研究会に出席し、会誌『或問』を購読する人を会員と認める。

本会は、言語学、歴史学、科学史等諸分野の研究者の力を結集させ、学際的なアプローチを目指している。また研究会、会誌の発行によって若手の研究者に活躍の場を提供する。学問分野の垣根を越えての多くの参集を期待している。
本会は当面、事務局を下記に置き、諸事項に関する問い合わせも下記にて行う。

〒564-8680 吹田市山手町 3-3-35　関西大学以文館３階 KU-ORCAS
第３プロジェクト室（Tel.ダイヤルイン 06-6368-3268）
E-mail:u_keiichi@mac.com
代表世話人：内田慶市